



ワタナベまさたけ
渡辺正健さん
35 監督
大分舞鶴高校 ▶ 明治大学
▶ Honda 熊本

Honda 熊本の野球部には、野球だけをやるのではなく、人としての在り方を指導しています。社会人チームですので、野球選手である前に、会社の従業員です。選手が会社に戻ったときに役に立つ人材を育てることが監督の使命だと思っています。

野球を通じて人材育成とは、「自ら考え、自ら行動できる人間」を育成すること。会社では、なぜうまくいったのか、なぜ失敗したのか常に考える必要があります。野球でも同じことが言えて、プレーでうまくいった理由、失敗した理由を他人にも説明できるように自己分析を積み重ねることで勝利につながります。野球部は会社の中で人材育成機関だと思って指導しているの、自己分析ができないと会社でも役に立たない。平日頃から伝えていきます。ただ野球だけをやっていけばいいという訳ではないのです。



試合を終えて、本田技研工業(株)熊本製作所の徳竹浩所長(中央)、杉浦功一郎部長(右から2番目)、渡辺正健監督(右端)が準優勝の報告に来庁

約40年前からHonda 熊本が大津町に根を張り、都市対抗野球大会に出場するときは大津町の名前で出場しています。「町」代表として出場するチームが少ない中、昨年の大会では唯一の町代表として出場でき、誇りを持って試合に臨みました。チームの中には大津町に住む選手もおり、大津愛があるからこそ地元を盛り上げるために勝利を届けたいと思っています。

Honda 熊本野球部は、地域に密着した野球部なので、地域とのつながりを特に大切にしています。近年は、コロナ禍の影響を受けてきていないのですが、野球教室を開催し、野球を通じて地域の人たちと交流をしてきました。コロナが緩和されれば、もっと前に出て地域の人たちとつながる活動を増やしていきたいです。勝負事に勝つだけでなく、地域の中で活動することも私たちの役割だと思っています。

① 監督から選手へ

「町」の代表として戦う誇り

② 選手から地域へ

地域の支えがあつての野球部

③ 応援する人の声

19年ぶりの準優勝。コロナ禍で思うように応援ができなかったが、大津町の名をかけた戦ったHonda 熊本。スポーツを通じて地域のために頑張る人たちがいる大津町。チームが強くなれば、企業も強くなる。そして、結果的には社会全体の発展につながるのではないかと。人と企業が強くなる大津町はもっと元気になる。もっとわくわくする町になるにちがいない。



かわしまかつや
川嶋克弥さん
5 主将
日南学園高校 ▶ 明治大学
▶ Honda 熊本

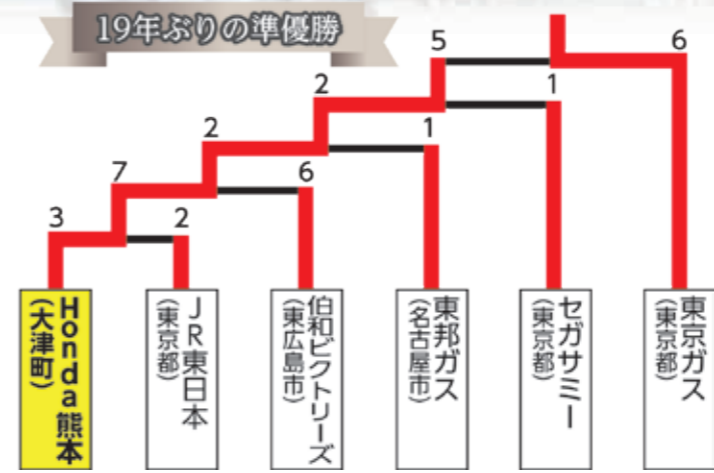
昨日の自分より今日の自分」とチームに伝えていて、少しでもうまくなって1日を終わることを意識しています。その積み重ねが自分やチームを成長させてくれます。野球は団体スポーツですが、個としての成長がないことには、チームとしての成長はありません。過去の成績に満足せず、「一戦一勝」を心掛け、目の前の試合を大切に、チームとしての価値を磨いていきます。



都市対抗野球大会を
終えて
企業スポーツチームがある
大津町

第92回都市対抗野球大会が昨年の11月28日から12日間、東京ドームで開催されました。全32チームが全国から集まり、大津町のHonda 熊本が出場しました。Honda 熊本は、今大会で6年連続九州代表として全国大会に出場しています。

Honda 熊本の対戦結果



都市対抗野球大会とは、全国各都市(市町村)の代表が競う社会人野球大会です。第1回大会は昭和2年に開催されており、プロ野球よりも古い歴史があります。各チームには、首長(町長)からの推薦とユニフォーム右袖への都市章(町章)表示が義務づけられています。企業名ではなく、町の名前で出場する唯一の大会です。また、各地区予選で敗退したチームから合計3人まで選手を補強できる補強選手制度も都市対抗ならではです。今大会、Honda 熊本も2人の補強選手を迎えて戦いました。

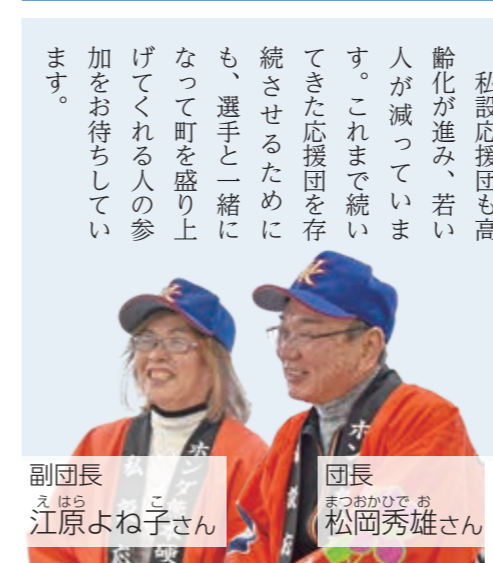
活躍に盛り上がる町



赤のピスを着用して応援する町民と試合会場で大津町の黄色の法被を着てエールを送るHonda 熊本の応援団

Honda 熊本の躍進に大津町も盛り上がりを見せました。コロナ禍のため、「町民応援団」の結成はできませんでしたが、パブリックビューイングの会場はチームカラーの赤に染まり、1プレー毎に大きな拍手が沸き起こりました。

試合会場となった東京ドームの巨大なオーロラビジョンには、大津町の紹介VTRが映し出され、ドームの中央高くに町旗が掲揚されました。大会を通じて大津町の名前が全国に知れ渡る機会となりました。



副団長 江原よね子さん
団長 松岡秀雄さん

私設応援団も高齢化が進み、若い人が減っています。これまで続けてきた応援団を存続させるためにも、選手と一緒に盛り上げてくれる人の参加をお待ちしています。

私設応援団も高齢化が進み、若い人が減っています。これまで続けてきた応援団を存続させるためにも、選手と一緒に盛り上げてくれる人の参加をお待ちしています。

私設応援団も高齢化が進み、若い人が減っています。これまで続けてきた応援団を存続させるためにも、選手と一緒に盛り上げてくれる人の参加をお待ちしています。